

◆書評◆

ゲイル・サラモン著 藤高和輝訳

『身体を引き受ける

マテリアリティ
トランスジェンダーと物質性のレトリック』

(以文社 2019年 ISBN 978-4-7531-0355-3 3600円)



中村 美亜

(九州大学大学院 芸術工学研究院)

2018年にお茶の水女子大学がトランス女性受け入れを表明すると、『『ターフ論争』でもいうべき事態』が起きた(千田2020)。トランス女性を女子大学に受け入れた場合、トイレや更衣室をどうするのかという議論が喚起され、受け入れに否定的な論調が広がったのである。「ターフ」(TERF)とは、“Trans-Exclusionary Radical Feminist”(トランス排除的ラディカルフェミニスト)の頭文字で、トランス女性を一般の女性と同等に扱うことに否定的なフェミニストのことを指す。

フェミニストとトランスジェンダーの折り合いがよくないのは、今に始まったことではない。『身体を引き受ける』でも一つの大きなテーマとなっている。フェミニストの多くが、ジェンダーとは、セックス(生物学的性別)によって分化された「身体」にまわりついた社会のイメージと理解する一方で、トランスジェンダーの多くは、セックスとは関係なく、自らが感じとる「身体」の感覚だと捉えているからである。加えて言えば、ジュ

ディス・バトラー以降のジェンダー研究者たちの「身体は社会的に構築される」という主張が誤解され、曲解された形で社会に広まっているという事実も、状況をさらに悪化させている。しかし、「身体」をめぐるこのような諍いを続けるのは生産的ではない。

バトラーの考えを継承する著者のゲイル・サラモンは、『身体を引き受ける』において、性別について言及する際に参照される「身体」は、決して物質的なものではなく、「^{フェルト・センス}感じられ方」に関わるものだとし、この問題への交通整理を試みる。現象学、精神分析、クィア理論、トランスジェンダー研究では、「感じられ方」について様々な議論がされてきた。それらの共通点や相違点を検証することで、性のアイデンティティに関する「身体」の理解を深めることができ、トランスジェンダーの議論をデカルト的な枠組みから解放することが可能になる。ひいては、フェミニストとトランスジェンダーの間の生産的な対話にもつながる、と示唆する。

本書は、サラモンの博士論文を元にしており、ジェンダー研究に関連したテキストの批評を通じて論が展開されている。全体は4部構成で、第I部では、本書の理論的基盤を構築すべく、フロイトの精神分析（第一章）とメルロ＝ポンティの現象学（第二章）が再解釈される。第II部では、トランスジェンダーの言説に見られる論理が批判的に検証され（第三章）、フェミニズムとの折り合えなさについて要因が分析される（第四章）。第III部では、リュス・イリガライ（第五章）とエリザベス・グロス（第六章）のテキストが読み直され、性的差異と身体の関係が整理される。第IV部では、公的文書に示される性別符号に関する議論を引き合いに、性別が比喻としてしか存在し得ないことが暴かれる（第七章）。

フェミニズムやトランスジェンダーの言説では、性別について言及される際には、つねに「身体」が参照されてきた。しかし、いつ、どのように性別が決定されるかは曖昧なままだった。実際に性別決定の根拠として用いられるのは、「私のジェンダーの感じられ方^{フェルト・センス}、生まれたときに割り当てられた私のジェンダー、現在の他の人たちによって知覚されている私のジェンダー、私の遺伝子構造（染色体上のセックス）、私の二次的な性別の特徴（表現型のセックス）、私の外的な身体形態上のセックス（外性器）、私の内的な身体形態上のセックス（男性なら精巣、前立腺、女性なら子宮、卵巣）、私のホルモン上のセックスなど」多様である（310-311頁）。

ここで重要なのは次の二点である。一点目

は、「セックス」と呼ばれるものですら根拠が曖昧で、それ自体が意味を担うためには社会的な何かを参照せずにはいられないこと。二点目は、「ジェンダー」は、社会を分析するのに有効な概念であるが、それは、個人がどのように性別を知覚、認識し、性別意識をもつか（本書でいう「感じられ方^{フェルト・センス}」）とは区別して考えなければならないということである。評者も、以前から生物学的性別、社会的性別に加えて、「個々人の社会心理的性別」を設定する必要があると主張してきた（中村2011）。分析概念であるジェンダーと、個々人において感じられる性別観は一致するとは限らない。これらの混同が物事を複雑にしているのである。以上の点がクリアになれば、フェミニストも、トランスジェンダーも、ジェンダー・アイデンティティを語る際に自分たちが参照している「性別化された身体」は、確固たるものとしてではなく、社会と自分との関係において築かれた（実際には、違和感として顕在化した）感覚に基づくものであることが理解され、両者の接点が見えてくる。

評者は英文学専攻でも、アクティブなジェンダー研究者でもないが、本書で取り上げられているフェミニズムやトランスジェンダーのテキストの多くは、2005～2008年にお茶の水女子大学21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」の一環として、故竹村和子さんが主宰していた「文献検討会」への参加を通じて読んだことがあった。またこの頃は、トランスジェンダーに関する多くの英語文献にも目を通していた。当時は

違和感を持ちながらもうまく言語化できずにいた多くの点が、この本では明解に整理され、建設的な議論へと発展されており、一つの章を読み終えるごとに、爽快な気持ちになった。

その一方で、第七章の「官僚政治的な管理を支配している論理」(303頁)に関する分析に関しては、解決への糸口が示されていないことに物足りなさを感じた。「官僚政治的な管理」というのは、人々に対する抑圧の構造である反面、多くの人たちの社会生活を潤滑にする方法でもある。もしこれを否定するのだとすれば、どのようなオルタナティブを提示できるのかを考えなくてはならない。この点は、冒頭で紹介した「ターフ」の議論とも深く関わってくる。

評者は、現在、芸術活動や文化事業が多様な人たちの共存にどのように関わることができるかを研究している。そこで鍵とされるのは、ローカルな現場での「価値創造を通じた課題解決」である(文化庁×九州大学共同研究チーム2020)。課題を直接解決しようとするのではなく、課題が無効化されるような価値創造を通して課題解決をはかるとい

アプローチだ。言語的な実践やユニバーサルな制度改革に限界があるとすれば、こうしたアプローチが社会に複層的に広がっていくしか方法はないと考えている。サラモンはどのようなアプローチに可能性を見出しているのだろうか。話を聞いてみたい。

訳文は平易で読みやすく、訳者による解説も非常に充実している。専門外の読者には、この「訳者解説」を先に読むことをお勧めしたい。ただ、タイトルの“Assuming a Body”(身体を想定する／思い描く)を「身体を引き受ける」と訳したことには少し違和感ももった。少なくとも、本文(5頁8行目)では、シンプルに「身体を想定する」という意味で訳す方がわかりやすかったのではないだろうか。

本書は、フェミニズム研究とトランスジェンダー研究を架橋する意欲的な試みである。批評理論に馴染みのない人にはとっつきにくいかもしれないが、ジェンダーに関わるアイデンティティが、身体との関わりにおいてどのように形成されるかを真摯に考えたい人には、うってつけの一冊といえるだろう。

参考文献

- 千田有希, 2020, 『『女』の境界線を引きなおす』, 『現代思想』3月臨時増刊号(総特集 フェミニズムの現在) pp. 246-256.
- 中村美亜, 2011, 「性同一性障害—議論されてこなかった問題の本質」, 吉岡斉編集代表『新通史・日本の科学技術—世紀転換の社会史1995年～2011年』第3巻(第6部 ジェンダーと市民活動) 原書房, pp. 409-432.
- 文化庁×九州大学共同研究チーム編, 2020, 『評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック—一人ひとりの課題にせまり社会に新しい価値観をつくる』九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ.